

2025年度 イリユージョンライブ活動報告

(オープンキャンパス・神大フェスタ・しらはた地区センターまつり)

人間科学部 人間科学科
イリユージョンライブ有志

イリユージョンライブの紹介

人間科学部 吉澤達也

人間科学部イリユージョンライブは、人間科学部が新設された2006年に発足した団体です。メンバーは、人間科学部に所属する有志の学生と教員により構成されています。心理学の一分野である錯覚のおもしろさを伝える活動を主としており、イベントに参加された方々に、錯覚を楽しみながら学んでいただけるよう工夫をしております。今年もオープンキャンパスを始めとする地域の活動の中で、錯覚の体験イベントを開催してきました。例年、展示のクオリティの高さだけでなく、説明する学生たちに対しても大変高い評価をいただいております。イリユージョンライブに参加している学生メンバーは、週一、二回程度の活動の中で、自身が様々な錯覚を学びながら、体験の仕方や説明の仕方を検討しています。来場された方々に楽しんでいただくことはもちろんですが、私たちも楽しみながら活動しております。

2025年度イベントへの参加報告

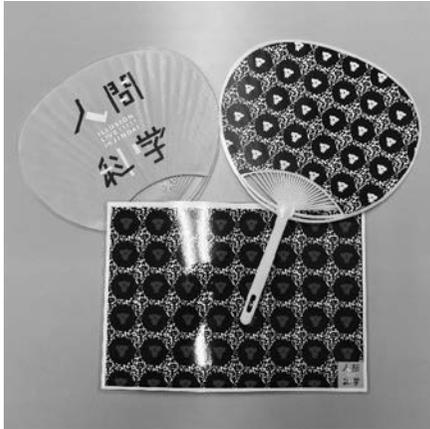
人間科学部 小原健一郎

2025年度の活動といたしまして、オープンキャンパス、しらはた地区センターまつりへの参加、神大フェスタ、ファラボみなどみらい展2025での作品展示など、様々なイベントに携わりました(なお、ファラボみなどみらい展2025については、本稿での報告は割愛いたします)。今年度は、オープンキャンパスでの新しい展示企画として、「ラバーハンド錯覚」を体験できる展示ブースの製作を行ったほか、錯視の仕組みを活用した図柄を描き、下敷きやうちわ、錯視アクリルチャームを製作しました。アクリルチャームは五種類の錯視をモチーフに、全26種類をファラボみなどみらいにて製作しました。これらのアクリルチャームの中には、錯視が生じている状態と錯視が生じない状態を比較できるように仕掛けを施したデザインも含まれています。試行錯誤を重ねた結果、完成度の高い作品を製作することができたと考えております。

オープンキャンパス

オープンキャンパス参加報告

今年度のオープンキャンパスでは、全17種類のブースを出展いたしました。本稿では、各ブースを担当した学生の感想を、一部ではありますが紹介いたします。また、新たな試みとして、ファラボみなどみらいで製作したカプセルマシンの使用、複数のブースを回ることによってカプセルトイが引けるスタンブラー形式のイベントを実施しました。カプセルトイの景品には、錯視の仕組みをもとにデザインした下敷きやうちわを用意し、来場者の方々から大変ご好評をいただきました。本年度のオープンキャンパスも、学生との交流を通して錯視・錯覚を体験していただくことで、来場された皆さまの思い出に残るようなイベントとなったのではないかと考えております。イリユージョンライブのイベントを体験していただくことで、神奈川大学の学生の雰囲気や、大学では楽しみなことが学ぶことができるという魅力を伝えることができたと思っております。



配布した景品



オープンキャンパスの様子

奥行きブース担当に関する感想

浅田 菜緒（1年）

私は、オープンキャンパスで奥行きブースを担当しました。このブースでは、回転している窓を片眼で見ると逆回転して見える錯視や、実際に凹凸のある立体的な絵を片眼で見ると、凹んでいたところが出っ張って、出っ張っていたところが凹んで見える錯視が体験できます。私たちは左右の眼で少し違う映像を見ていて、左右の二つの映像を組み合わせることで奥行きを知覚しています。しかし、片眼で見ること、その奥行き手がかりが使えなくなった時には、今までの経験や陰影といった他の手がかりから奥行きを判断するため、この錯覚が生じます。奥行きブースは入口付近の展示だったため多くの人に体験していただきました。最初はわかりやすい説明ができるか、人によって錯視の起こり方が異なるので対応できるか、など不安な点が多くありましたが、私の説明を聞いて「面白い」と言ってくださる方もいました。この時、伝わって良かったと安堵したと同時に楽しさを感じました。その後は、来てくれた方の反応に合わせて説明を変えてみたり、自分のおすすめのブースを紹介したりと、その人に合わせた対応ができたと思います。このような経験は今までの経験がなかったもので、自分の成長につながる貴重な機会となりました。

オープンキャンパス参加報告

石井 暖人（1年）

「ベクション」と聞いても、ほとんどの人は「何それ」で終わるだろう。実際に私もその一人で、錯覚の一種とは聞かされたが、その言葉の響きだけでは特に興味を持てなかった。

しかし響きはともかく、ベクション自体はとても身近な現象である。例えば、駅で停車中に隣の電車が動き出した時、自分の乗っている電車が動いたように感じる経験があるだろうか。これこそ日常に潜むベクション体験そのものである。オープンキャンパスのベクションブースでは、説明よりも体験を重視し、まず装置に入ってもらうことで、自分は動いていないのに回転しているように感じる感覚を体験してもらった。来場者の反応は戸惑いや驚き、楽しさなど、様々だったが、体験後にベクションが身近な日常にあることやVR、テーマパークのアトラクションにも応用されていることを伝えると、私と同じように多くの方が強い関心を示してくれたように思う。また、来場者に説明する立場として関わったことで、当初はあまり関心の無かったベクションを始めとする錯視・錯覚に対して、仕組みや人の感覚の特性、さらには幅広い応用可能性に目を向けるようになり、オープンキャンパスの経験が学びへの意欲を高めるきっかけになったと感じている。

伝える力、伝わる楽しさ

大迫詩歩（1年）

私は、オープンキャンパスで座標の部屋というブースを担当しました。座標の部屋は、天井や柱、正面の壁が斜めになっている部屋です。体験の内容としては、部屋の中で正面の壁に足を向けて仰向けになります。その状態のまま周囲を見て、自分の足元を見ます。すると、床は水平であるにもかかわらず、自分が坂道に寝ているように感じるという体験です。大きくて普段の生活ではあまり目にしない不思議な形なので、オープンキャンパスで展示している数あるブースの中でも一際目立ち、多くの方に楽しんで体験していただきました。

初めてのオープンキャンパスでうまく説明できるか不安でしたが、先輩方の話し方や分かりやすく伝えるためのアドバイスを参考にして、ブースに訪れてくださった方と積極的に関わることができました。先輩方が励ましの言葉や説明に対するポジティブなフィードバックをたくさんしてくださいましたが、自信につながりました。私自身が初めて座標の部屋を体験した時に感じたワクワクや驚きを同じように味わってもらいたいと思いオープンキャンパスに臨んだので、「楽しかった！」と言っていただけときは嬉しかったです。

エイムズの部屋

岡本颯子（1年）

私はオープンキャンパスでエイムズの部屋を担当しました。エイムズの部屋とは、設置された部屋をのぞくと同じものの大きさが違って見える、という錯覚のブースです。エイムズの部屋は視覚の特徴や興行きの感じ方など様々な要因が絡まって起こる複雑な錯覚です。一年生である私は今回が初参加となるのですが、オープンキャンパスでは興味を示してくれた人々に錯覚が起こる仕組みを説明するため、まずは私自身がしっかり理解する必要があります。また、ブースは一つしかなくスムーズに多くの方に体験していただくために、複数グループへ一度に説明する場面も多々あり、そういった場合には一グループに説明するのと違って、来場者の方一人一人の経験や感じ方に寄り添った説明をしにくい点が難しかったです。一組目の方に説明をするときはとても緊張し、その後も何度説明をしても早口になっていないか、説明の順番を間違えていないかなどの心配事が多く不安でした。ですがエイムズの部屋でトリックアートのような写真を撮るなどして多くの方に楽しんでいただけたことが何よりも嬉しかったです。

色のない部屋を担当して得た学び

藏谷紗彩（1年）

私は大学一年生として初めてオープンキャンパスに参加し、「色のない部屋」という体験ブース

を担当しました。このブースでは、ナトリウムランプと呼ばれる主にトンネル内で使用されていたオレンジ色の照明を暗室で用いています。その結果、部屋の中にある物がすべてモノクロに見え、色を失ったかのように感じられる体験をすることができます。物体の色を知覚するためには、「眼」

「光」「モノ」という三つの条件が必要です。私たちが日常的に浴びている太陽光には、多様な色の光の成分が含まれています。一方で、ナトリウムランプには限られた色の光の成分しか含まれていないため、たとえ「眼」と「モノ」の条件が揃っていたとしても、通常であれば識別できるはずの色が分からなくなります。体験していただく前にこの仕組みについて説明を行いました。初めてのオープンキャンパスということでとても緊張しました。しかし、高校生だけでなく大人の来場者の方々も驚きの声を上げている様子を見て、次第に自信を持って楽しみながら担当することができました。一方で、来場者数が想像以上に多く、誘導に苦労する場面もありました。また、質問に即座に答えられない場面もあり、自身の知識不足を実感しました。今回の経験を通して、分かりやすく伝える説明力、より深い知識の双方を高める必要性を感じました。今後は、より自信をもって来場者に対応できるように頑張りたいです。

鏡映描写のブースを担当して

高橋果鈴（1年）

私は今回オープンキャンパスで鏡映描写という

ブースを担当しました。鏡映描写とは鏡が立てられていて、その前に星が枠取られた紙を置き、鏡を見ながらその星をなぞってもらう課題です。多くの方が上手に進まず、書きづらいいとおっしゃいます。これは普段見えている方向と手の動かす方向は一致していますが、鏡を使うことによって視覚と運動にズレが生じることで起こります。普段見ている世界に慣れているから鏡を見ると分かりづらくなってしまうことが体験できるブースです。私は最初、説明をするのにとっても緊張しました。鏡映描写はほとんどが体験なのであまり説明はないのですが、少ないからこそ何を言っているのか上手くまとまりませんでした。しかし先輩の説明を聞いたり、何度も繰り返すうちに自分の伝えたいことがまとまるようになりました。説明をした際に「なるほどわかりやすい！」「楽しかった」と言ってくれたとき、とても嬉しくなりました。思ったより来場者が多くて対応するのは大変でしたが、臨機応変に動くことができました。他の人に体の仕組みを説明することはなかなかない機会なので、とても良い経験になりました。

オープンキャンパスを終えて

野辺 夢夏（1年）

私は一年生として、今回が初めてのオープンキャンパスでした。高校生の頃、来場者として見ているイリュージョンライブのブースはとても輝いて見え、「いつかあの中に立ってみたい」と憧れていました。そんな自分が今、同じ舞台に立ち、

来場者を迎える側として参加していることに、不思議な気持ちと喜びを感じました。私は「変化盲」を紹介するブースを希望し、担当しました。変化盲はよくメディアなどでアハ体験として紹介されている変化の検出についての課題で、徐々に写真の一部を変化させたときに、最終的に大きな変化となっても、気づくことができない現象です。このブースを選んだきっかけは、実際に自分もアハ体験を体験して、まんまと騙された経験があったからです。その不思議さと驚きを自分だけでなく、来場者にも体験してもらいたいと思い、出題者として楽しませたいという気持ちから、このブースを担当することに決めました。ブースでは、多くの来場者が変化に気づけず、「見ていたはずなのに分からない」「もう一度やりたい」という声に、人に伝える楽しさややりがいを実感しました。また、ブースに人が少なくなったときには、自分の持ち前の明るさと積極性を生かして声をかけ、来場者を勧誘しました。実際に足を止めて体験してくれる人が増え、自分から動くことの大切さを学びました。今回の体験は、これからのイリュージョンライブでの活動への大きな自信につながったと思います。

オープンキャンパス・変化盲ブース感想

松田 愛（1年）

私は、オープンキャンパスにて変化盲ブースを担当させていただきました。昨年度、高校三年生の私は来場者の一人として母とイリュージョンラ

イブに参加しました。そこでは錯視をはじめとした、好奇心を刺激するような様々なブースを体験しました。その中でも変化盲は非常に興味深く、最も強く記憶に残っています。そして、今年度は主催者側として変化盲の面白さを知っていたためオープンキャンパスに取り組みました。私は昔から人前で話すことが苦手なため、緊張がほぐれず上手く説明できるか不安でした。しかし、お越しいただいた来場者の方々に興味・関心を持ってもらうため自分なりの説明を加え、楽しく会話をすることができました。やはり、初めは慣れず、説明がままならなかったものの、数を重ねるうちに来場された方の反応を楽しみながら説明できるようになりました。オープンキャンパスを振り返ってみると、来場者の方々への対応含めブース運営に楽しく取り組むことができたと感じています。また、実際に説明してみると反省点も多く見えてきました。来年度に向けて改善していきたいです。オープンキャンパスの活動によって変化盲への理解が深まり、自信を持って応対できる力を身に付けることができ、非常に良い経験になったと振り返っています。

オープンキャンパスに参加して

三島 大輝（1年）

私はオープンキャンパスでラバーハンド錯覚の体験ブースを担当しました。ラバーハンド錯覚は体験者の手を隠して近い位置に置いたラバーハンドを刺激することでラバーハンドが自分の手

のように感じる錯覚を起こす体験の事です。このブースは私の興味から始まり今年から設けたブースであったため、展示物の作成から行いました。テスト環境を中々整えることができず、前日まで錯覚を起こすために試行錯誤を繰り返して、イリュージョンライブのメンバーや先生方など沢山の方が力をお貸しくださったことで、当日には何とかブースとして完成させることができました。当日に参加いただいた皆様の「不思議だった」「変な感覚だ」などの自分が体験して欲しかった意見を沢山頂けたことがとても嬉しく、やって良かったと感じました。そして良いことばかりではなく、説明が簡潔にできなかったことや体験中に装置が壊れてしまったことなど課題点や苦しい思い出がありました。良い点と悪い点、両方見つけることができたオープンキャンパスで得たものは大きく、とても楽しかったです。来年は他のブースと遜色がないブースにできるよう努力したいです。

オープンキャンパス参加報告

村田 遥花（1年）

私はイリュージョンライブに所属して、初めて参加したイベントがオープンキャンパスでした。イリュージョンライブは私が高校生の頃、大学見学の時に訪れていたもので、自分が高校生に説明する側になっていることが感慨深いです。私は今回「色のない部屋」と「錯視カード」というブースの担当でした。特に「錯視カード」では、ジャストロー錯視という錯視を来場者の方に説明したと

きが印象に残っています。ジャストロー錯視とは、同じ大きさの二つのかまぼこ型の図形を上下に並べると、上に置いた方が小さく見えるという錯視です。この説明をしている際、来場者の方にも一緒に図形を動かしてもらいながら説明していました。説明の最後に、二つのかまぼこ型の図形は同じ大きさだと説明するために二つの図形を重ねると、来場者の方に驚いてもらえてとても嬉しかったです。最初はどのように説明したら、来場者の方に面白いと思ってもらえるか探りながら説明していました。回数を重ねるうちに、面白いと思ってもらえる説明がわかってきました。今回のオープンキャンパスで説明した人に、いつかイリュージョンライブのメンバーとして、再会出来たら嬉しいと思っています。

オープンキャンパスでの経験を通して

持田 弥生（1年）

私はエイムズの部屋を担当しました。「実際には部屋が歪な形をしているのに、外から覗き穴を通して片眼で見ると、四角い普通の状態に見える」という錯視のブースです。イベントでは、装置の窓にペットボトルを置き、左右の大きさが違う感覚を体験していただきました。以前に参加した、しらはた地区センターまつりとは異なる雰囲気戸惑う場面もありましたが、先輩方のやり方を見ながら、ペアの人と自分なりの説明の仕方ができるようになりました。さまざまな方が体験にいらっしやってくれたため、年齢層や関心度に合わ

せ、説明する内容に強弱をつけることが難しかったです。しかし、試行錯誤を繰り返して、それぞれの方に合わせた対応がスムーズにできるようになったことは、自身のステップアップに繋がったと感じています。来場者の方から、体験が面白かったと感想をもらえたことで、錯視の面白さを知っていただけではないかと思えます。オープンキャンパスを通して、来場者一人一人に向き合い、説明の仕方を工夫することの難しさと楽しさを実感し、それは貴重な経験となりました。



オープンキャンパス後の集合写真

神大フェスタ

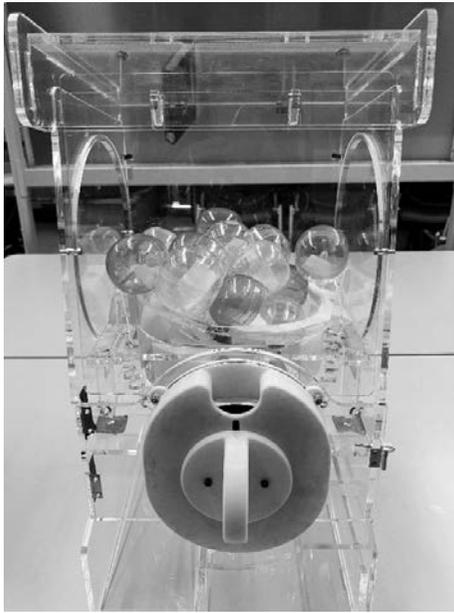
神大フェスタでの出展

10月25日、26日に行われた、神大フェスタに参加しました。神大フェスタでは学生が主体となり、企画、出展を行いました。今年度は展示と物販に分かれ、活動を行いました。オープンキャンパスとは異なる暗室を使ったベクションの展示など、オープンキャンパスとは少し違った雰囲気での展示を行いました。お子様からご年配の方まで、幅広い世代の方との交流の機会となりました。

神大フェスタ参加報告

大平 萌楓（1年）

私は、カプセルトイの物販と錯覚ブースの展示の両方を担当しました。物販では、商品に描かれている錯視の説明を行いました。商品はイリュエ



ファブラボみなとみらいにて製作したカプセルマシン



カプセルトイの景品説明



カプセルトイ景品

ジョンライブのメンバーが作っていて、こだわりがたくさん詰まっています。そのため、多くの方が興味を持ってくださり、たくさん購入していただけて嬉しかったです。展示では、大きさ重さ錯覚というブースを担当しました。クマとコアラのぬいぐるみを抱っこして見た目が重さの感覚に与える影響について体験していただきました。現象について理解して、それを説明することが大変でした。しかし、説明を通じてその現象についてさらに理解を深めることができたのが良かったです。来場者の方々には楽しんでいただくことを意識して行いました。来場者の方の驚いた顔や笑顔を見るのが楽しかったです。神大フェスタでの展示の説明や物販ということで様々な年代の方にご来場いただきました。様々な方と錯視・錯覚を通じて交流できたことは私にとって特別な体験になったと思います。

神大フェスタ参加報告

藤本 優奈（1年）

私は、神大フェスタで幾何学的錯視のブースを担当しました。幾何学的錯視とは、図形の大きさ、長さ、方向などの特性が実際とは異なって知覚される現象のことです。今回の神大フェスタでは三種類の錯視をそれぞれアクリル化したものを展示しました。一つ目はジャストロー錯視です。これは同じ大きさの扇形を上下に並べると下に置いた図形がより大きく見える錯視です。二つ目はシェパード錯視です。これは二つの同じ大きさの平行四辺形の一方を傾けると、同じ大きさのはずなのに違った形、大きさに見える錯視です。三つ目はカフェウォール錯視です。これは色付きの格子を交互に並べると平行なはずの境界線が傾いて見える錯視です。これらの錯視をアクリル化したことにより、実際に手に取って幾何学的錯視を体験していただきました。神大フェスタでは幅広い年齢層の方が来場されるため、言葉選びや話し方に気をつけて説明を行いました。また、展示していない幾何学的錯視を数個取り上げた「錯視カード」を作りしました。カードを使い、他の錯視の紹介や、他ブースでの待ち時間中に配布し楽しんでいただきました。幾何学的錯視の面白さを様々な形で伝えられるよう工夫しました。

しらはた地区センターまつり

しらはた地区センターまつりへの参加報告

6月21日、22日に開催された「しらはた地区センターまつり」に、昨年引き続き今年も参加しました。今年は、一年生を中心に企画や準備、運営を行いました。小さなお子さまが多く来場するイベントということもあり、錯視ブースの展示に加え、ソーマトロープの作成コーナーを設置しました。ソーマトロープとは、表と裏に別の絵が書かれた円盤を回転させることで、二つの絵が一つに重なって見える残像を利用したおもちゃです。当日、お子さまたちには、左右や上下が反転して見える眼鏡を装着した状態で輪投げをしてもらいました。輪投げの棒には虫の絵が貼られており、輪が棒に入ったらその虫を捕まえた、という設定です。捕まえた虫の絵をソーマトロープに貼り付



ソーマトロープ

け回転させることで、裏面に描かれている虫かごの絵と一つに重なり、虫が虫かごに入っているように見えるソーマトロープを作り、持ち帰ってもらいました。昨年の同イベントにおいてぶんぶんゴマを製作して楽しんでくれたお子さまたちも、今年はソーマトロープ作成に取り組み、満足した様子で帰っていききました。お子さまたちにとって、錯視を身近に感じながら楽しめる良い機会となったのではないかと感じております。

しらはた地区センターまつり参加報告

神谷 一花（1年）

白幡地区センターで行われたしらはた地区センターまつりに参加させていただきました。このイベントでは一年生が主体となり、どのような出し物を行うか、またどのように運営していくかを話し合いながら準備を進めました。当日は、ソーマトロープを使用したおもちゃづくりの体験ブースを担当しました。ソーマトロープとは、円盤を回転させることで表と裏に描かれた絵が一つに重なって見える、人間の残像現象を利用したおもちゃです。今回のブースでは、表に昆虫、裏側に虫とりかごの絵を貼り付け、子どもたちが自分で制作したおもちゃを通して、楽しみながらソーマトロープを体験できるよう工夫しました。イベントに参加していた子どもたちは、幼稚園生から小学生まで幅広い年齢層でした。そのため、楽しんでもらいながらどのようにソーマトロープの錯視現象に興味を持ってもらうか、子どもたちの年

齢や反応に応じて伝え方を変えることが難しかったです。しかし、実際にソーマトロープのおもちゃで遊んだ子どもたちが、虫かごの中に昆虫が入って見える様子に驚き、親御さんに報告したり、「なんで？」と首をかしげたりする姿を目にし、達成感を得ることができました。

しらはた地区センターまつり参加報告

菅沼 佑成（1年）

しらはた地区センターまつりでは、一緒に作って楽しめる「錯視・錯覚」の体験を行いました。来場者は子どもが中心で、ブースに来た子が「もう一回やりたい」と素直に反応してくれたのが特に印象的でした。こうした場で子どもに説明しながら進める経験はあまりなく、最初はどんな言葉なら伝わるのか分からず戸惑いました。説明が長くなったり、難しい言い方をしてしまったりする場面もありましたが、回数を重ねるうちに一緒に手を動かしてもらい、途中で「今どう見える？」「どっちが大きく見える？」と質問しながら進めると伝わりやすいと気づきました。反応が止まったときは言葉を短くしたり、例を変えて見せたりして、子どものペースに合わせる意識も持てるようになりました。子どもが夢中になる姿を見るとこちらの緊張も和らぎ、反応を直接受け取れることが大きなやりがいだと感じました。次回は、説明の順番をもっとシンプルにして、子どもが迷わない声かけや小さなヒントを準備し、初めてでも安心して楽しめる体験にしていきたいです。